

## 僕の家族

大山中学校 三年 黒川純一郎

僕は、日本人の父とフィリピン人の母の間に生まれたいわゆる「ハーフ」です。自分に、外国の血が流れているとか、ハーフとかの自覚はありません。もちろん、日本で生まれて育っているのでフィリピン語はペラペラ話せず、単語を少し知っている程度です。僕が小学生の頃は自分から「ハーフ」であることだけを友だちに伝えていました。しかし、僕が日本で育ったことは知っているのに「じゃあ何かフィリピン語を話してよ」と、よく友だちからふざけ半分に言われていました。いやな気分になったのではないですが、自分がフィリピン語を話せるわけもなく、困ってしまうことが多かったです。このようなことに、少し不思議だと感じましたが、学校だけでなく、家庭でも同じようなことが起こりました。フィリピン出身の母が、よく聞いたことのない日本語があると僕にその意味を聞いた時、うまく話せず困っていたりした時、僕はついイラツとなり、「

もっと日本語をお父さんと勉強すれば？」と言ってしまいました。その後、母はなぜか急に涙を流しながら家を出ていきました。その時は父が母を連れ戻してきましたが、なんで母は家を出て行ったのか、不思議でした。今思えば、相当ひどいことを言ってしまったと後悔しました。その心にもない不用意な発言が母にとって涙を流すようなきつい言葉だったのかとも思いました。自分が母に言ったことは、自分が友だちに言われたことと変わりませんでした。

以前、テレビで外国人に対してだけ残業をさせたり、きつく接したり、給料が日本人より低かったり、いろいろな業務で日本人を優先するニュースを見たことがあります。その人の国によって、宗教や文化が違って仕事のやり方を変えたり、特定のことをさせたりというようなことはあるかもしれませんが、僕が見たのは、明らかに外国人に対してだけ違う扱いをしていたので、それはおかしいと思いました。みんな同じように仕事をして、生活する。個人的に何も違いはないと思います。もっと、日本がサポートするべきです。日本では少子高齢化による労働力不足から外国人労働者の受け入れ

が増加して、外国人労働者に対する差別や偏見も少なくなっているらしいが、完全に差別や偏見が完全になくなっていないと思います。インターネットで調べると、日本人の外国人に対する知識不足から偏見につながっていることがわかりました。

そこで外国人に対して差別をなくすにはどうすれば良いか考えました。キーワードは「多文化社会」を実現するということです。社会科の教科書に多文化社会という言葉がよく使われています。これは、様々な文化的特徴を有する民族が、お互いの多様性を尊重し、平等に共存する社会のことを言います。僕の家族でも多文化社会を実感することがあります。僕の家は、梅の生産を中心に農業を行っています。梅の収穫や選別時期の農繁期には人手が不足して父が困っていることがあります。そんな時、僕の母のフィリピンの友だちが何人か手伝いに来てくれることを知りました。ほかにもアルバイトとしてベトナムの人や農業研修で韓国から実習生が来て下さったりしています。外国から来て下さった方々のおかげで農作業の効率が上がり、両親は助かっています。農作業中だけでなく、

休憩時間になるとみんなで自分の国や文化について楽しく会話をしあっていて、両親も笑顔で会話に加わっています。僕も手伝いをしていて時に外国語で話しかけられて困ってしまうことがあります。今では慣れてスマホの翻訳アプリで簡単な会話ができるようになりました。もつと母にフィリピン語を学び、外国の多くの文化を学ぶことが大切だと思うようになりました。

僕の体験から、もし周りの誰かが「あの人はみんなと違う」と思ったことを言ったり、その人に嫌な行動をしたりしたならばそれは偏見からくる差別につながると思います。「多文化社会」の中で、たとえ文化が違ってても、お互いがわかりあうことが大切だと思います。

外国人に対する差別以外でも障がいや性別、生まれた環境などに對する差別にも許せません。これらのちがいは「個性」であり、みんなちがっていてその人自身もそのちがいを大切にすべきです。どんな人ともお互いを理解し合い、尊重し認め合うことがこれから大切だと僕の家族から知ることができました。

